



中西書文

丙午花供養

慈母様おれさ縁へ

花を奉るこも毎れり

あんめくさあしりさ縁へ

おのこさささ

おのこさささ

あけつちもささるる系もむはる 果更

そり思ふ縁の衣子 渭川

増るるあはれさささ縁へ 有

たか

口のさへあれた男ともあり
舟れ無舟の角より碇のゆれ
意御珠とよりのを這りぬ
月のもも机も紙をまよそふ
又舟とちつ中の舟より

葵
車蓋
南栄
白岱
其成

余畧

西平の想書

酒餘ハ下さるうなつうの山
花の中を都乃石にも涙あふ
むらさや花のおもひを下り
花吹雪山はさるれあそび
幕をさうをさるれあそび
山挽りあそびうさく奥のむ
むのらねりはさるれあそび

渭川
南栄
蛙面
平谷
角塔
東雨
其成

之中の凌ぎ振乃葉耀の家
 けしきやあやうき人仕く花
 籠るあやうきもの振うれ
 志ぬ道回るりり山振
 杜り子をるあやうき山はく
 花吹雪や何とみける傍一人
 夕振もく酒ゆく神のこあり
 流の花をふいてはくは龍心
 長庚

酒振こくはくはく志
 振戸やま各明く見れは
 おくくあはれ振るを夕振
 咲やふ入り無原の散り色
 振物今くはく川酒二合
 遠くそ世をく西をく振うれ
 ちくろくく小冊く花のあやうき
 情や振いくあやうきく声
 定雅
 在貫
 百葉
 志該
 紫葉
 尼侍
 女
 月峰
 ぬ枕

星のちれをの端の花えり

谷鳥

笈士の者さしりるる花の奥

女
五下

き近や花を端の家曲りる

甫尺

花のや切好るる意好

車蓋

般多漬りくちり也方く

有庸

花の里むもは子もあうり

羅外

家の家振るる正ふき好

文堂

むちや衣を洗ふ若き

終春

紗襦違るるまゝ猿のあ

眠江

片心花よ毎のや風りき

曾陸

むちや衣を洗ふ若き

白黛

端をぬ毛そり花の山振

玄子

ちり振るるやうれしき山

巴溪

代を澄むる葉や山はく

嵐月

公あや振るる牛の皆

我春

毛纏も是も花の中心あり

都花

掛あそびの紙も信し山にくは

如此

花の色端ありしりり上き

一葉

老人の巾性えりりき下

芽木

娘らる山静あり縁う那

免石

小原女うきあし娘えや母の花

南路

長生を人うきあしをいふ

南我

花の中心えをいふを難う

百明

人うきあしの山静え花うき

曉山

あそびの紙も信のほれりり

女
ちと

かふりもきこし心あし

重厚

杖投あそびもきこし山静

大溪

あそびあそび人のあそびあそび

かし

あそびあそびあそびあそび

寿筈

花の縁りあそびあそびあそび

花街

春うきく花のうき花の東山

文推

滝橋守 彈丸をいそぐ人のまゝ

都窪

人いそぐもくもく幕のちり

在東京

杜市

花あけぬ花や成るむえぬ

松磨

酒堂より宇治へ出りし山樞

タイコ

百喃

子をはれと人いそぐもくもく

踏月

拙一人むくもくもく山樞

夕馬

又うきく花のうき山乃上

氣角

猿人も春をさるるもくもく

狐木

春うきく花のうき鳥のまゝ

ハコタ

斗流

春うきく花のうき山

古律

春うきく花のうき山

南化

春うきく花のうき山

新子

春うきく花のうき山

フツハ

不世

深ハ山をこぬきて佳く〜の如
大川 巨州

明〜の下のつら〜
小谷 湖

〜と〜の如く〜
カイツ 香拙

い〜の芥子燻り〜
新城 泉梅

〜の年〜は〜命〜
青牛

か〜の味〜
石ア 良文

人〜の操〜
亀洲

花〜の〜
甚悦子 洗菰

花〜の〜
平松 亜漢

花〜の〜
女 志々

〜の城を〜
辻村 雲仙

〜の山
紫水

〜の山
梅本 拍子

夕〜の〜
隆花

梅あり落しうしやう新し
志計

もろもろつれり花の生るま
成山

長刀の影をてりて山はく
梅支

谷一ツ跡くおしる梅の影
声志

咲花を獨たのしむる
可笑

咲満く煙くくくくく
思声

仁保

水口

むちや朝ふ夕なる花西
唐那

隣りてあむ深家
唐州

侍のくく海をぬりや山はく
如江

折入し水く花咲一夜
芦角

岩角やきくくく山はく
慕水

一人二人花をくくく
翅英

さあ舞あんなつて花をを
蓮車

さあ花くくくくく
梨花

心よやちくくく山はく
拍由

沼井

葉の多き木葉の枝を揺る部 毛投 之枝

川一ツ袖をして衣し山さく ハニ 吾友

振先の火をうらう ハニ 海雲

花の枝よ毛刀柳ふ奴 白子連 瀑布

是をまへにあとよとく 白子連 浣水

芥、乃柳の枝をまて 白子連 蕨人

山猿ちくぬかと吹河 白子連 無曲

境毫乃煙ハ情し 白子連 可計

奥の山やあゝ揺る 廿 千之

我よくやあゝふ 廿 霞寺

喰今のを 津ハ夕 梅二

雨を 津ハ夕 朱二

七つ 津ハ夕 万化

むのは 一身日 丈船

山 一身日 藤卓

おぼろごころのしづかき酒の味 歌由 雨降

持りけしむらさきもやいささか 大通

花士の歌よき酒のささき 花卿

色よ秀ふらむをぬれぬ は 文波

流るるしづかき酒の味 有之

花をよき酒の味 架橋

諸人の歌よき酒の味 楚橋

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

酒をよき酒の味 文節

弁曲や梅流りしちり先
と食らふ年都夢よよはと人
和旦

あしめとくし風の梅りか
毒五

卯ももくまのちりむ星
毒太

日中もくまのちりむ星
谷泉

風の花心をくぐりたり
赤溪

小春の流傳る京の妙中や
る曹

十系

ワカサ

志乃ちね

信若田日市

舟の流るるから成る日のちり
湖尚

この舟の流るるから成る日のちり
季山

月乃夜やちをちり人の流
文里

此山をけ一ちりて花見か
倭風

山梅をちりて流るる
梅之流

ちりてあつちりて流るる
赤我

ちりてあつちりて流るる
梅森

房長磯村

脱かけた袖に續く花の香

うららかな花の香をくぐりぬ

月二重の影に一枝松の影

松を花の系色をくぐりぬ

はしけくもくちゅう中の松の影

是の流る妻の如やおさく

嵐山松を於てはるる

柳月

傳水

英

三木

祖竹

麦風

二柳

加賀

法花

ちか花を於てはるる

あつた花の色を於てはるる

石二つ向ふの山やおさく

首のゆやあつたあつた

持人もあつたあつた

ワレ合の競へも花の香

花の香二つの影はるる

あつたあつたあつた

山又

素雅

不十

江涯

奥淵

柳首

朔宇

夏春

上下に田

文法

山月

梅のやまの堀山の一さう
甲州 牧又

山御のやまの梅の影ほけ
海河

光る山の花の影ほけ
輝著

さうりやのふ花をさし
伴良

岩しそ花よりし梅
梅冠

山御のやまの梅の影ほけ
志洞

夕暮のやまの梅の影ほけ
ワルカ 悦溪

おもしろい花の影ほけ
五高

花の影ほけ
丹後田舎 木越

日傘の影ほけ
梅里

長あしのやまの梅の影ほけ
法 社牛

谷川の上の梅の影ほけ
は来桂政 芦花

さうりやの梅の影ほけ
下総 尺文

天明六年辰供養
 青
 丹
 三
 六
 辛
 用

三條通御幸町西入丁
 菊舎太兵衛持

向
 村
 西
 口
 入

極
 猶
 よ
 り
 寺
 又
 こ
 の
 部
 の
 事
 累
 更
 頃
 の
 あり
 け
 ら
 ぬ
 極
 あり
 け
 ら
 ぬ
 水
 の
 あり
 け
 ら
 ぬ
 山
 極
 可
 友
 甲
 しく
 いた
 ち
 の
 あり
 け
 ら
 ぬ
 車
 文
 以
 こそ
 却
 て
 氣
 の
 あり
 け
 ら
 ぬ
 乾
 更
 三
 條
 通
 御
 幸
 町
 西
 入
 丁
 菊
 舎
 太
 兵
 衛
 持

順經のあむゆきまうしる 極 うら 布兵 十ヤニ
 あそれ 涼しむ 暖く ぬの ころり ぬ ヒロシ 近冥
 水も 涼く ぬる 暑ゆりし 山 極 長 可友
 甲しくいむ ちの ぬる 枕 了 ぬ 車 車文
 ぬさ ぬる ぬの ぬる ぬん ぬ ぬ 枕 乾 雙

極 猶 よ れ 寺

ふくむと 都 一 一 一

累 更

向 空 村 中 西 十 六 八 人

蕉 門 書 林

京 三 条 通 御 幸 町 西 江 入 丁

菊 舎 太 兵 衛 梓

